



雨ニモマケズ

1月25日

「福中の学び合い学習」

校長 原 直樹

今年度の福中では、夏休みの職員研修を境に、生徒同士の「学び合い」の時間を重視した授業づくりに取り組んできました。

文科省は「主体的・対話的で深い学び」を打ち出し、中学校ではR2年度から今の学習指導要領が本格実施されました。「生徒が主体となり、対話的な学習活動を展開し、深い学びを得させる」と聞けば、だれもが学校の授業がそうであってほしいと頷けるはずです。

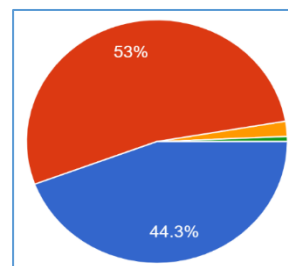
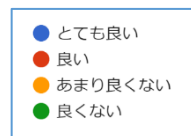
ところが、学校の授業を目に浮かべてみてください。日本では、150年前に公教育が始まりました。同じ年齢のたくさんの人間が、学校の教室という同じ空間で、決められた時間に、縦横規則正しく並んだ机と椅子に着き、同じ教科書の同じページを開き、先生の説明をほぼ一方的に聞き、同じ進度で、同じ内容を考え、覚え、etc…という学習スタイルを守ってきました。時々指名された生徒が発言し、正解だとか不正解だとか、そんな評価をされたりしますが、生徒が主体的であったかという、やはり受け身の授業であったと言わざるを得ません。第一、私たちは、「生徒が授業をする」と言わず、「生徒が授業を受ける」と言います。この言葉自体が受け身です。先生の説明に対する集中が切れ、注意されたり、昔なら竹の根っこでできた指し棒（掃除の時に黒板消しをはたくことにも使った）で頭をコツンとやられたりなんてこともありました。おそらく地域の皆さんも、保護者さんも、我々教員も、そんなイメージの授業を経験してきたはずです。

では、今の日本の授業はどうか？実は150年経った今も、ぱっと見の授業風景は変わっていません。いくら「主体的・対話的で深い学び」と念じたところで、150年続いた風景が頭にこびりついている限り、変わっていかないのです。

そこで、福中職員は、生徒が「主体的・対話的で深い学び」ができる授業をどうすれば創り出せるか悩み、今行っている「学び合い学習」を進めるようになりました。これまでの授業との大きな違いは、教師の説明の時間を極めて短くし、生徒同士の話し合い、教え合う時間をたくさん取っていることです。教科により、また単元や学習内容によっては、教師の説明の時間が多くなる場合はもちろんありますが、目指すは生徒が相互に学び合ってその学びを深めていくことです。「学び合い」を重視した授業をここまでやってきて、例えば、数学科では、以前なら50分かけて学んできた内容を、生徒同士の学び合いによる授業では15分で理解でき、残った時間で演習問題がたっぷりできるということが実現しています。



先日、生徒の学習委員会が行った生徒アンケートの一部ですが、「学び合い形式の授業はよいと思いますか？」という質問に、「とてもよい」「よい」と答えた生徒は97.7%です。その理由として「考えが深まる、広げられる」「より理解できる」「教える側も頭を使う」「皆がわかる」などと回答しています。また、課題点として「同じ人としか交流ができないのでもっといろいろな人と交流すべき」「男女での交流がまだまだできていない」「周りをよく見て一人で悩んでいる人のところに行く」という意見もありました。



福中の授業風景は、今年度かなり変わりました。主体的・対話的で深い学びに向かって！